

神門 善久・著

日本農業への正しい絶望法

著者がつけたのか、編集者がつけたのか定かではないが、まあ、尋常ではない書名ではある。ご丁寧に終章は「日本農業への遺言」ときた。2010年にNHK出版から出版した『さよならニッポン農業』で、著者は農地の荒廃の現実を厳しく追及したが、結局、警告むなしに葬式を出すところまで衰退の道を駆け落ちたというわけだ。

簡単に「絶望」の内容を紹介する。

本来、日本農業は技能集約的な農業だった。それが見栄えやマーケティング重視、農業の分業化などによって、肝心の名人農家は絶滅に瀕している。その回復が必要だが、鍵となる農地利用が地権エゴによって乱れ、消費者の味覚も頼りなくなってしまう。マスコミヤ「識者」は改革派にせよ保護派にせよ、なれ合い

書評

編集委員

山田 優

幸福な田舎のつくりかた

金丸 弘美・著

全国1000の農山村を訪れた著者が見た地域おこし成功のポイントが散りばめられている。多くの事例に共通するのは、結果を問われる責任者が、地域の強みを把握した上で事業のコンセプトを明確にし、ぶれない決断をすることだ。

例えば、水産業が盛んな山口県萩市の道の駅。当初、市は、大手コンサルタントが提案した観光客向けの市場を構想したが採用せず、鮮魚だけでなく青果や酒などの店舗を入れ



て幅広い日用品をそろえ、市民の台所として住民に愛される道の駅を目指した。にぎわいのある道の駅になり、結果的に観光客を呼び寄せた。

「干される」覚悟の悲観論

の対立をしているだけで真実から目を背けている。従って将来は悲観的と描く。

正直、違和感を覚える部分が多い。繰り返す、名人農家の話が出てくる。例えば筆者の妻は苦味があるピーマンが苦手。しかし、ある名人農家のなら食べられる、らしい。別の「土作り」名人は、どんな農作物でもどんな地域でも現地に行けば必ずりと問題点を指摘することができると、らしい。

だが、いずれの事例も仮名の上、検証できる材料は見当たらない。

いくつかの部分では正論を説いているように思う。著者がこれまで一貫して主張してきたように、さまざまな農地規制が日本農業の足を引っ張ってきたのは事実。著者は終章で「この本を書いたことで干される」と覚悟する。しかし、農業書の中では幸いよく売れているようである。墓場から戻って正論を唱えてほしい。

◇出版
◇価格

グローバル化とフードエコノミー

フランクス・



方で、肥満が各地で問題化している。グローバルな食品チェーンが勢力を伸ばす一方で、ローカルな地域ブランドも注目される。

グローバルとローカルを足した「グローバル」とい

田中 修・著

植物はすごい

「すごい」と言われても、もの言わぬ植物のどこがすごいのか見抜くのは容易でない。ところが本書は、なるほどと納得させるだけの証拠を次々に提示する。しかもその多くは、素人にも納得できることでもある。

例えば一粒のキャベツの種は4カ月後には約24万倍に成長するだけの力を秘め、栗、柿には渋みという



通り一遍の戦略では地域の良さを十分発揮できない。産地の売り込みにも共通するが、メッセージを伝えるには、従来のやり方から転換した必要だ。成功事例には、地域の関係者を説得できる、権限と責任が明確なリーダーの存在があることが分かる。

一方、戦略の方向性は地域ごとに千差万別だ。本書では各地の産直、グリーン・ツーリズムなど、幅広い取り組みが紹介されているため、その点でもヒントを得やすい。

(学芸出版社、1890円)

道占

森書房)
藝春秋)
藝春秋)
出版社)
出版社)
レ(協会)
非常識
三五館)
去
新潮社)
羊書林)
農林社)
日調べ)

句